

世界パワーリフティング

選手権大会

IN オーランド、USA

2016年11月13-19日

報告・写真：福島 和文

2016年世界パワーリフティング選手権大会がアメリカのオーランドで開催されました。

試合会場はオーランド空港内のハイアットホテルという、とても便利な場所で、選手の移動も楽だったと思われます。今回の渡航先であるオーランドは最近、銃撃事件があり、日本選手団の個人行動が制限されているということで、これまで可能だった渡航期間の短縮が認められず、全日程、同一行動でしか参加出来ないことになりました。

そこで私は仕事の関係で、残念ながらセコンドとしては参加出来ず、観客としてオーランドに向かいました。

パワーリフティングは、ほとんどの方が仕事を持ちながら関わっています、長期間休んで試合に参加することが難しい方もたくさんいると考えられます

今後はこのような事が出来るだけありませんように各方面のご理解を頂けますよう、よろしくお願いいたします。

このような試合以前の問題が少しありましたが、選手は男子8名、女子6名が予定通り参加することができ、皆さん精一杯、戦いました。 それでは日本人選手を中心に、観客席から見た福島和文の観戦記です。

女子47キログラム級 2位 福島 友佳子



SQ 182.5 kg
BP 132 kg (世界記録)
DL 162.5 kg
T 477 kg

世界パワーでは初めて、福島和文がセコンドを出来ない事態が起きましたが、パワーハウスの久保コーチが、自分の練習を後回しにしてでも約2か月間ピーキングを合わせてくれたお蔭で無事2位を獲得し、ワールドゲームズの切符を獲得しました。

今年の台湾チェン選手は強すぎました、友佳子が予定通り9試技成功させたとしても今回は敵いませんでした。

チェンのトータル500 kgは、そう簡単

には破ることは出来ませんが、福島友佳子にとってまたひとつ大きな目標が出来ました。パワーリフティングは個人競技ですが、特に世界で戦う選手は自分の頑張りだけでなく、パワーリフティング協会をはじめ全国の皆様のご協力を頂いて、ハイレベルの戦いが出来ると思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

女子52キロ級 10位 酒巻 依子

SQ 155kg
BP 102.5kg
DL 155kg
T 412.5kg

今回は各種目ともベストの更新はなかったようですが、全日本が好調だったようなので、仕方なかったのかも知れません。調子が良くなかった時には、課題も見つかったと思います、こういう時は次に生かすチャンスです。このクラスは日本でも、強い選手がたくさんいます、これからも確実に記録を伸ばし続けてくださいね。



女子52キロ級 15位 赤川 智子

SQ 135kg
BP 95kg
DL 140kg
T 370kg



アサマトレーニングジムから初出場の女子選手が2名参加しました。

まずは、赤川選手です、彼女は一見のんびりしているように見えていましたが、試合時の姿や、終わった時の悔しがっている表情を見たときに、これからもどんどん強くなると感じました。

記録も全日本とほぼ同記録でしたが、初の世界の舞台では立派な記録だと思います。

ぜひ来年も出場権を獲得して頂き、世界でお会いしましょう。

女子57キログラム級 13位 加藤 幸枝

SQ 172.5 kg

BP 90 kg

DL 172.5 kg

T 435 kg

肩を痛めていたという話は聞いていましたが、終わってみれば8試技を成功させて、トータル435kg。ユッキーもベテランの試技になって来ましたね。デッドリフトのフォームを見ていたら、これからもどんどん伸びると思いました。今回のようにキッチリ成功試技を重ねていけば、トータルの日本記録も向こうから近づいて来ると思います。



女子57キログラム級 17位 淵上 宏恵

SQ 150 kg

BP 90 kg

DL 135 kg

T 375 kg



アサマトレーニングジムから初出場、女子選手のお二人目の登場。

淵上さんは仕事等でも世界を飛び回っているようですが、それは今後国際大会で活躍する為には絶対にプラスになると思います。

全日本の記録と比べて、スクワットとデッドリフトが伸びませんでしたが、大会を通して収穫はいっぱいあったと思います。今後の活躍を期待していますよ。

女子63キログラム級 5位 北村 真由美

SQ 190 kg

BP 173 kg

(MI世界記録)

DL 192.5 kg

T 555.5 kg

年の真由美さんは、十分にメダルを狙える位置にいましたが、スクワット、デッドリフトが伸びず、惜しい5位となりました。しかし、ベンチプレスでは世界記録の173kgに成功（その後、ソロビオバに更新されてし

まいました) これは素晴らしい記録です、このフォーミュラは日本人にはそう簡単には破られない記録だと思います
「パワーに真由美さん、ベンチにカオリさんがいるから、私も頑張ることが出来る」いつも友佳子は言っています
これからも怪我のないように皆さんの目標でいて下さいね。

男子59キロ級 6位 佐竹 優典

SQ 252.5kg

BP 160kg

DL 230kg

T 642.5kg

スクワットで252.5kgの日本記録、トータル642.5kgの自己ベストで堂々の6位、初出場とは思えない
試技でした、これからの大活躍が期待されます。





パワーハウスの竹花選手も頑張っています、「竹竹コンビ」で59kg級を引っ張って行って下さいね。そして久保君のセコンドありがとうございました

男子66キログラム級 6位 佐藤 義宏

SQ 270kg
BP 220kg (世界新)
DL 240kg
T 730kg

表彰台を狙える力は充分にあり、特にベンチプレスでは220kgの世界記録を樹立しました。しかし全体では5試技の成功に終わり、悔しい6位となってしまいました。

本人は納得のいかない試合になったようですが、日本パワー男子では数少ないメダルを狙える選手の一人です。ベテランとなったサトキンのこれからの戦いが楽しみです。

試合後の1か月ぶりのお酒の味はどんな味になりましたか？



男子66キログラム級 8位 鈴木 豪

SQ 247.5kg
BP 190kg
DL 275kg
T 712.5kg

世界パワー初出場の鈴木選手はスクワット以外ですべて自己ベストを更新という素晴らしい結果となりました。

得意のデッドリフトでは、なんと275kgで日本記録の更新となりました

E SQUATIR から強い選手が





育ってきました、サトキンと共に日本の66kg級を盛り上げて下さいね。

男子74キロ級 4位 濱田 展行

SQ 295kg

BP 225kg (MI世界記録)

DL 280kg

T 800kg

世界大会に強い濱ちゃんが800kg出しました。

全日本では悔しい終わり方で大谷選手に敗れたので、今回は本人としては嬉しい結果となったでしょう。

デッドリフトも280kgを引いたので、バランスの良い選手になりましたね

本人に握力はどんな方法で鍛えているのかと質問したところ、

「握力の握るやつをカチャカチャやってます」という濱ちゃんらしい答えでした。

まだまだ強くなりそうな、伸び盛りの濱田選手です。

男子74キロ級 5位 大谷 憲弘

SQ 307.5kg

BP 220kg

DL 265kg

T 792.5kg

毎年おなじみの濱田選手とのバトルが最終デッドリフトまで繰り広げられました。

大谷選手はデッドリフトの第3試技を濱田選手の792.5kgにかぶせて成功させ、体重差で暫定の4位に浮上しましたが、濱田選手も第3試技に成功させて残念ながら5位となりました

しかし得意のスクワットでは307.5kgの日本記録をきっちり更新しました。

今回はESQUATIRから66kg級の鈴木選手、女子52kg級に酒巻選手が出場するなど、大谷選手と合わせ3名が世界パワーに参加しました。

良い選手がどんどん育っています。





男子83キロ級 14位 小早川 渉

SQ 310 kg
BP 217.5 kg
DL 125 kg
T 652.5 kg

今回は調子が良いと聞いていましたが、スクワットの第2試技で右脚を痛めてしまいデッドリフトでは記録だけ残して終了しました。

とても悔しい結果となりましたが、早く治してリベンジして下さい。

小早川選手は今回、選手団のリーダーとして選手の皆さんの調整もして頂きました。ありがとうございました。

男子93キロ級 10位 久保 匡平

SQ 355 kg
BP 255 kg
DL 255 kg
T 865 kg

最近パラパワーリフティングで全国を飛び回っている久保選手ですが、今回は福島友佳子のセコンドに付いてくれ、久保選手自身のセコンドも佐竹選手に付いてもらった為、なかなか思うように自分の練習は出来なかったのではないのでしょうかその中でトータル日本記録の865 kgは立派だったと思います。

スクワットも良くしゃがんでいました、ただ強いだけではなくパワーハウスのコーチとして見本になる試技でした。

そしてプライベートな事ですが、久保くんおめでとうございます



男子105キロ級 12位 阿久津貴史

SQ 337.5kg

BP 267.5kg

DL 290kg

T 895kg

阿久津選手は、昨年まで15年連続で記録を更新続けてきたということでしたが、残念ながら今年は更新出来なかったとのことでした。

重量級は軽量級と比べて扱う重量が重い分、怪我のリスクも多くなりますが、日本人でトータル900kgを越える数少ない選手ですので、これからベテラン選手となっても長く記録を伸ばし続けて下さい。



男子ベストリフターは、ロシアの Fedosienko が昨年に引き続き1位となりました

女子ベストリフターは、昨年から一気に記録を伸ばしてきたウクライナの Soloviova が台湾のチェンを振り切って獲得しました

3位に福島友佳子が入りました



パワーハウスコーチ

久保匡平観戦記

今年の世界男女は 11/13-19、オランダ、USA で開催された。

今年の世界パワーは翌年に行われる 4 年に一度の大会「ワールドゲームズ」の選考会にあたるため、どの階級も各国の強豪たちが火花を散らす戦いが繰り広げられた。

また今回は喜ばしいニュースが二つ。

1 つは日本のウエイトトレーニング器具メーカーのザオバ (BULL) が IPF とスポンサー契約を結び、公認メーカーとなったこと。日本で行われる世界ベンチは BULL で行われるだろう。

もう一つは言わずと知れた日本が世界に誇るベンチプレス児玉大樹選手が IPF の『殿堂入り』をはたした。ベンチプレスでは初の快挙。

殿堂入りが決まったのは試合前日の IPF 総会。喜ばしい情報は SNS で発信されていたから沢山の人が知っていたと思うが、まさか本人が急遽オランダの会場まで来てしまうとは皆がビックリしたことだろう。さすがレジェンド児玉！今後の活躍も目が離せない。

男子 59 kg 級

日本の先陣を切ったのは若干 19 歳で全日本を優勝し世界パワー出場を決めた 59kg 級の佐竹優典選手 (関東学連、青山学院大学)。初の世界男子にもかかわらずあまり緊張した雰囲気は感じられずのびのびとしている印象を受けた。

ここ最近の試合では得意のスクワットの取りこぼしが多く、トータルを思うように伸ばせていなかったが、今回は違った。232.5-242.5-252.5 と一般の日本記録をマークした。幸先よいスタートだ！

ベンチプレスの第二試技に珍事件。バーをしっかりと受けて準備が整い、審判のスタートの合図がかかった。セコンド、日本選手団が見ている中、バーを降ろすのかと思いきや、ラックに返してしまった。見ている皆が、何があったのだ？と思っていたがすぐにフォームを組み直しベンチを開始、挙げ切ることができなかった。後から話を聞くと、審判の合図がリプレイスに聞こえたとのこと。

失敗の後、気持ちを切り替えて第三試技はきっちり成功した。147.5-157.5 × -160 でベンチプレスも自己ベストをマーク。

デッドリフトのフォームも改良され、三種目とも穴が無くなってきた。220-230-240 × で佐竹選手の初の世界男子は終了した。トータル 642.5kg で 6 位入賞。ジュニア日本新！とても素晴らしい結果だ。

優勝はロシアの Fedosienko Sergey で SQ290-BP205 (WR) -DL267.5、トータル 762.5kg で世界新を叩きだした

男子 66kg 級

この階級は昨年度までロシアが 2 名の選手を送り込んできていたが、今回はエントリーがなかった。どうやらロシアの男子選手は全階級で 2 名しか出場できないという制限を IPF から設けられたらしい。ロシアの選手の高重量を扱う試技が観られないのは残念だが、チャンスは俄然広がった。

日本からは全日本ベストリフターの佐藤義宏選手 (速太郎道場) と、全日本 2 位で全日本ジュニアベストリフターの鈴木豪選手 (ESQUATIR) の二名がエントリーした。

佐藤選手はノミネーションの順位が、ワールドゲームズの出場確定圏内の 3 位以内を十分に狙える位置に着けていた。

さてスクワット。佐藤選手は 2 本成功で 270kg。対する鈴木選手は第一試技を落としてヒヤヒヤしたが、第二、第三ときっちり決めて 247.5kg とした。

ベンチプレスでは鈴木選手がきっちり 3 本成功させて 190kg。佐藤選手は第一試技 215kgを決めて第二試技から 220kgの世界記録に挑戦！挙上途中に少し止まったように観えたが見事成功、世界記録樹立した！更なる更新を狙った第三試技の 222.5kgは押し切ったものの残念ながら失敗に終わった。

サブトータルの時点で佐藤選手が 3 位、鈴木選手が 9 位に着けている。佐藤選手はデッドリフトでどこまで逃げ切れるか注目だ。

しかしこの階級の上位陣はデッドリフトを得意としている選手が多い。少しでも重量を積み上げたいところ。第一試技の 240kgは難なく成功、しかし第二試技の 247.5kgが引ききれない。第三試技も引ききれず、トータル 730kgで試合を終えた。デッドリフトの強い海外の選手たちの追々を振り切ることができず、6 位となった。

鈴木選手はデッドリフトを得意としている。話を聞くとギアが 40 ～ 50kg効かせているとのこと。デッドスーツを 50kg効かせている選手はそうはいないだろう。そんな鈴木選手は第三試技で一般日本記録となる 275kgを成功させ、トータル 712.5kgとし 8 位でフィニッシュ。ジュニアを卒業しても是非続けて頂きたいと思う。

この階級の優勝者はしばらく優勝から遠ざかっていた台湾の Hsieh Tsung-Ting。SNS で動画を拝見していたが、今回の大会に向けて相当気合いが入っていた。その姿は試合当日の試技にも表れていた。感情を爆発させて喜んでいゝ Hsieh 選手を観るのは初めてだ

女子 47kg級

今回の世界パワーは全日程参加が義務付けられた。

日本が世界に誇るパワーリフター福島友佳子選手（パワーハウス）がエントリーしている。しかし毎年セコンドで帯同している御主人の福島和文さんが仕事の都合で全日程参加できず日本選手団に入ることができなかった。代わりに私、久保がセコンドにつかして頂いた。

世界二連覇と、ワールドゲームズの選考がかかった大事な試合、正直自分の試合より緊張していた。まずはスクワット、第一試技は絶対に落とせない。しかし私がミスをしてしまい、ラップの巻くタイミングを失敗して、第一試技を送り出してあげることができなかった。絶対にやってはいけないミスが一番大きな舞台でやってしまったのだ。頭が真っ白になってしまいそうだった。

しかし福島選手は焦るそぶりもみせず、「大丈夫」と声をかけてくれた。緊張が解れた同時にようやくいつもの自分が戻ってきた。

気を取り直し今度は巻くタイミングも大丈夫。第二試技を同重量の 172.5kgを成功させ、第三試技も 182.5kgをきっちり成功させた。

気持ちを切り替えてベンチプレスへ。練習では肘の調子が悪く、あまり良い調整はできていなかったが、勝負強さを発揮した。120-127.5-132 と三試技成功でオープンの世界記録を樹立した。

残りはデッドリフト。170kgを引けばトータルマスターズ 1 の世界記録だ。

第一試技の 150kgを軽く引いた。第二試技は 2 位を確定させるべく 162.5kgを選択。これもしっかりと引いてほぼ下から追ってくる選手を振り切った。第三試技は 170kg、これは重かった。膝位まで浮いてきたバーはそこで止まってしまった。トータル 477kgで銀メダル。福島選手の力を十二分に発揮させてあげられなかった事を反省するとともに、ワールドゲームズに向けてサポートしていこうと思う。

この階級の優勝は福島選手の最大のライバル、台湾のチェン。先日のリオオリンピックのウエイトリフティングにも出場していたが、そこでは 6 位と順位は振るわなかった。結果を挽回すべく SQ210 (WR) -BP105-DL185 でトータルなんと 500kg！！

ついに女子最軽量級で 500kgの壁を超えてしまった。もちろんトータル世界新。ベストリフター 2 位も獲得した。まだまだ福島選手とチェンの戦いは続きそうだ。

女子 52kg級

珍しく多数のエントリーがあり、ノミネーション下位 4 名ほどの選手は 47kgと一緒に周った。

この階級には酒巻依子選手（ESQUATIR）と赤川智子（アサマトレーニングクラブ）が出場した。初出場の赤川選手は福島選手と同じラウンドで周っていたが、非常に落ち着いて試技を行っているのが印象的だった。酒巻選手は試合中、すごく集中し周りに人を寄せ付けないようなオーラを放っているのが印象的だ。

赤川選手は SQ135-BP95-DL140、トータル 370kg で 15 位。酒巻選手は SQ155-BP102.5-DL155、トータル 412.5 kg で 10 位だった。

この階級ベネゼエラの Dominguez Maria がジュニアの年齢にしてベンチプレスのオープン世界新なる 145kg をマークし、ロシアの Salnikova Natalia に迫る勢いだったが、そこは女王、終わってみると大差をつけて優勝していた。これにて一日目が終了した。

二日目、女子 57kg 級

寺田幸枝選手（TXP）と渕上宏恵選手（アサマトレーニングクラブ）の 2 名がエントリー。

寺田選手は今年の全日本パワー後、肩の腱板が断裂と関節唇の損傷が発覚し、フォーム改善をよぎなくされたと聞いていた。半年のフォーム改善でどこまで記録を出せるか注目していた。渕上選手は初出場、試技を観るのは初めてだ。そんな渕上選手、試合中を淡々とこなしていっている。緊張していないのだろうか？と思う位に表情が変わらない。後から、聞いてみると、結構緊張していたとのこと！全然そんな風には見えなかった。記録は SQ150kg -BP90-DL135、トータル 375kg 17 位。

寺田選手はフォームが改善され、取りこぼしの多かったスクワットで見事 3 本成功し 172.5kg の自己ベストをマーク。肩の不調が心配で BP は軽めからスタートしこちらも終わってみれば 3 本成功の 90kg。得意のデッドリフトは第三試技を落としてしまったが、全て終わってみると 8 本成功、トータル 435kg とし 13 位という結果を残した。肩の調子を戻し、来年は万全の状態で挑んで頂きたい。

男子 74kg 級

日本からは 2 名が出場。濱田展行選手（個人）と大谷憲弘選手（ESQUATIR）。

国内大会から熾烈な争いを繰り広げている濱田選手と大谷選手、二人の対決にも注目して観戦していた。

濱田選手のメインセコンドに付いたのは、今回の日本選手団を縁の下から支えてくださった、速太郎道場所属の本宮さん。国内にいるときから綿密に連絡を取り合い準備してこられたとの事。本宮さんは自作でラップ巻きの練習の為に疑似足を作成し練習するほど熱心に取り組んでこられたと聞いた。本当に熱い方だと思う。

話は試合に戻りスクワット開始。両選手とも得意としている種目で、日本記録を保持しているのは濱田選手。第一試技、濱田選手は 280kg を選択。ラックアウトの瞬間から様子がおかしい。バーベルをきっちり受けることができていない。不安定なまま何とか構えてスクワットの合図をもらったが、フィニッシュまで立ちあがることができない。濱田選手は先に行われた世界マスターズ選手権にも出場していたが、スクワットで失格してしまっていた。不安がよぎる。むかえた第二試技、ラックアウトの動きが良い！合図とともにしゃがんでいき軽く立ちあがった。見事成功！！日本選手団全員がホッとした。第三試技はなんと 15kg アップの 295 を申請。この重量も白二本をもぎ取り成功させた。第一試技は何だったのだ？後から聞くとラックの設定が高すぎて抜けなかったそう。パワーリフティングを新たに始めた方々もラックの高さ調整がいかに大切か考えてほしいと思う。

一方の大谷選手。スクワットは強いのだが心配ごとは深さが入るかどうか。第一試技の 290kg を軽く成功させ、第二試技は日本記録となる 307.5kg を申請。この重量も成功させて日本記録を樹立。第三試技は 3 位狙いの 312.5kg を申請したがこの重量は立つことができず失敗に終わった。

スクワットが強烈な Olech Jaroslaw が 367.5kg の M1 世界記録を成功させ会場が湧いた。

ベンチプレスに入りまたも濱田選手が第一試技 215kg を落とす。しかし第二試技は同重量を成功させ、第三試技では M 1 世界記録となる 225kg を成功させ、銀メダルを獲得。

大谷選手は第一試技 220kg を成功させ、第二、第三試技は 230kg を落としてしまい一本のみの成功となった。

デッドリフトに入り濱田選手、大谷選手、ベネズエラの La Rosa Lenin の三人で 4 位争い。

順位を少しでも上げてワールドゲームズの選考を有利にしたいところ。

サブトータルは濱田選手が 520kg、大谷選手が 527.5kg と優勢。第一試技は大谷選手が 240kg 成功、濱田選手は

260kgを成功させ大谷選手に逆転。第二試技、大谷選手は 250kgを無難に成功。濱田選手は 272.5kgを申請しこれを引けば 792.5kgになり一般のトータル日本記録になる。これを難なく引ききる！成功だ！第三試技は 280kgを申請する。

大谷選手も黙ってはいない。第三試技は濱田選手を体重差でかわすべく 265kgを申請した。集中し引き始めるとバーは浮いてきたが、膝上を越えたあたりから苦しい！苦しいがジワジワ返ってきてフィニッシュ。判定は？固唾を呑んで見守る。白2、赤1で成功！濱田選手に逆転し後は待つばかり。順位を意識した試合運びするのであれば、濱田選手は 275kgを申請するだろう。観客席で見ていた日本選手団の皆が口にしていたが、なんと 280kgのまま行くというのだ。74kg級でトータル 800kgの太台に乗せることを選択したのだ。

太台に乗せるべくプラットフォームへ。スタンスを決めてバーを握り、腰を落として引き始める。バーは止まることなくフィニッシュまで一気に引ききった。判定は見事成功！！

濱田選手とセコンドの本宮さんに笑顔がこぼれたのが印象的だった。濱田選手トータル 800kgで今回の世界パワーで男子日本人最高順位の 4 位、大谷選手は 5 位でワールドゲームズの選考の可能性に大きく望みをつないだ。このクラスの優勝はもちろん Olech Jaroslaw で 895kgだった。

3 日目

この日は男子 83kg級、女子 63kg級、男子 93kg級と長丁場の一日となった。

また冒頭でも述べたが、ベンチプレッサー界のレジェンド、児玉大樹選手が到着した日でもある。

男子 83kg級

3 日目の先陣は日本選手団のリーダーである小早川渉選手（速太郎道場）の登場。

スクワットはピーキングで昨年の世界パワーで記録した 322.5kgを安定して立たれていたのを拝見している。スクワットの第一試技は 310kgを申請。気合いの入った小早川選手が登場しバーベルを担ぐ。しかし上手く担げない。一度前にバランスを崩し、再度担ぎ直し合図をもらう。しかししゃがんでいる最中にラックに当たってしまい失敗。

第二試技は同重量を選択。担ぎは安定しているように見えた。深さを入れて立ちあがる。途中ぶれる場面があったが白二つで成功。あれ？様子がおかしい。歩くのが痛そうだ。セコンドの佐藤選手が抱えに行っていた。第三試技がパスの表示。嫌な予感がする。

どうやらしゃがんでいる最中に右の内側広筋を肉離れしてしまったようだ。

しかしベンチプレスも行い 217.5kg、デッドリフトも踏ん張りが効かないためスティフデッドで 125kgを引いて完走した。練習をしっかりとやり込めていたと語っていただけに本当に悔しいと思う。トータル 652.5kgで 14 位。肉離れを治し、来年の世界パワーで爆発してほしいと願う。

女子 63 kg級

2 位まで大混戦が予想される階級。勿論日本の北村真由美選手にもチャンスがある。

筆者はこの後に自分の試合を控えているので部屋でユーストリーム観戦。

スクワット開始。第一試技の 190kgを軽々成功。第二試技は 200kgを軽く立つもしゃがみが浅い判定。第三試技も同様しゃがみが浅くて失敗。競っている試合で二本落とすのは痛い。この階級の絶対女王ウクライナの Soloviova Larysa が 241kgの世界新を打ち立てた。去年は膝？を痛めていたのか元気無かったが今年は違った。

北村選手の得意種目である、ベンチプレス。狙うはオープンの世界記録！

しかし、世界記録を狙う選手が他にも二名。一人は絶対女王 Soloviova Larysa、もう一人は今年の世界ベンチで 184kgのシングルの世界記録をマークしたドイツの Von Bchhaus Gundula Fiona だ。北村選手を含め、三人のスタート重量は 160kg。

三人とも第一試技を成功。第二試技は北村選手が 167.5kg(M1、WR)を、Soloviova が 170kg、Fiona が 172kg(WR)を成功し世界記録が 172kgとなった。オープンの世界記録を狙いに来ていた北村選手は 173kgを申請。セコンドの浅間先生に送り出され、ベンチ台に向かう。しっかりフォームを組みバーベルをラックアウト。胸に着けて一気

に押し上げる！少し傾いたか、判定は？白二つで見事オープンの世界記録を樹立した。喜びを爆発させる北村選手。しかし今回の Soloviov は強かった。第三試技で 180kg を成功させ、先ほど北村選手が樹立した記録を超えてしまった。一体同じくらいの体重の男子で何人が彼女に勝てるのだろうか？ドイツの Fiona も体重差でベンチの金メダルを狙うべく 180kg にチャレンジしたが挙げることができなかった。

残るデッドリフト、北村選手は第一試技 182.5kg、第二試技 192.5kg と成功させた。第三試技の 202.5kg はフィニッシュが返らず失敗に終わった。トータルは 555.5kg で順位はスクワットの取りこぼしがひびき 5 位となった。試合後来年はベンチの世界記録を更新するとおっしゃっていたので来年は女子で 180 オーバーのベンチプレスが観られるかもしれない。

男子 93 級

日本からは筆者、久保匡平（パワーハウス所属）がエントリー。

セコンドに付いてくれた佐竹選手とはピーキングを合わせてもらい、しっかり調整することができた。

今回の目標は 93kg トータル日本記録更新である。

検量待ちをしているとき、レジェンド児玉大樹さんが会場に到着された。『めっちゃ応援するから頑張れよ』と声をかけてくれた。

検量後の栄養補給を終えて、スクワットのアップ開始。動きは悪くない。アップを進めていく中で日本選手団が裏まで応援に来てくださった。皆に見守られ最終アップの 310kg を担ごうとベルトを締めようとした時、なんとレバーアクションのバックルが折れてしまった。幸い締める分には問題なさそうだがやはり怖い。そんな時機転を利かしてくれた佐藤選手がタイタンのブースからバックルを購入し届けてくれた。またベルトのバックルを児玉さんが付け替えてくれた。本当に感謝しかない。この場を借りてお礼申し上げたい。ありがとうございます。

佐藤選手、児玉さんのおかげでスクワットの第一試技へむかえる。

93kg 級は A と B のグループに分かれており、私は A グループ、7 人で周ることとなった。第一試技は 330kg を申請。佐竹選手の巻きはバッチリで難なく成功。第二試技は 345kg を申請。7 人なのであまり休憩している暇はない。がなんと一人パスしてしまい 6 人に減ってしまった。すぐさまセコンドの佐竹選手に呼ばれ巻いてもらう。巻きは完璧で 345kg を成功することができた。少しフィニッシュでスピードが落ちた。重量選択で悩んだ末、355kg の自己タイ記録を申請した。休憩する間もなくすぐに巻いてもらう。気合いを入れてバーベルを担ぐ。スタンスを決めるとき右の膝がカクツとなり、バランスを崩したが何とか気合いで持ち直し、そして立ちあがった。久々に 355kg を成功することができた。実に 4 年ぶりである。スクワットの粘り強さに定評があるウクライナの Bilyi Sergii は、第三試技で 395.5kg をチャレンジし失敗したものの、会場を大いに沸かした。

ベンチプレスの調子が良くない。練習の時からムラがあり何とか形になったという感じだった。スタート重量は予定より 5kg 下げて 245kg にした。これは難なくクリア。世界の児玉さんが激を飛ばしてくれているのがよく聞こえた。第二試技は 255kg、少し粘ったが成功。第三試技は 262.5kg を選択した。第二試技より反発はあったが途中でバーが下がってしまい失敗に終わった。ベンチプレスではポーランドの Wegiera Jan が 305kg を成功させオープンの世界記録を樹立した。M 2 になっても記録を伸ばし続けているのが本当に脱帽だ。

サブトータルは 610kg、トータル日本記録更新にはデッドリフトで 255kg が必要だ。

第一試技は 240kg グリップも問題なく引ききる。成功だ。第二試技は一気に 255kg 申請し引いて日本記録更新を狙う。バーを握り一気に引ききる。無事成功しトータル日本記録は更新できた。残るは第三試技でもう少しトータルを伸ばしたい。260kg を申請しこれを引ききれず失敗。トータル 865kg で 10 位という結果となった。

93kg 級のトップは昨年同様ウクライナの Bilyi Sergii で 1012.5kg だった。

この階級で上位入賞するには 900 後半は必要になってきた。世界との差は中々埋まらない。

私の試合を持って 3 日目が終了した。残るは一人のみとなった。

4 日目

11 月 26、27 日にジャパクラシックベンチを控えている児玉選手（筆者もエントリーしていた）が朝から練習をするという事で見学と補助をしに行った。

そこではスーパーヘビー級の選手(勿論試合は終わっていない)や軽量級の選手達が早くも体を動かしに来ていた。試合後なのに早々と練習とはどんな体をしているのだろうか？

話を戻して、児玉選手のベンチプレスは 170kg で動きのチェックをしている。そんな姿を外国のパワーリフター達は興味津々に観察している。中には至近距離で動画を撮影しだす。写真を一緒に撮って欲しいと頼まれることもしばしば、流石日本が誇るベンチプレスマシーン（ウクライナの選手が命名）児玉さん。スターは大変だ！

そうこうしている間に日本人最後の選手である阿久津貴史選手（TXP 所属）の試合が始まろうとしていた。その前に女子 72kg 級が行われ、毎年のように繰り広げられるアメリカの Ribic とブラジルの Ana が接戦を繰り広げた。サブトータルで Ana がリードし、デッドの強い Ribic が一気にまくれるかが毎年の見どころ。今回は Ana がトータル 638kg で優勝、Ribic は逆転をかけたデッドを引ききれず 632.5kg で二位となった。

男子 105kg 級

膝の調子がずっと良くなかったと話す阿久津選手だったが、ベテランらしくきっちりコンディションを合わせられたみたいだ。スクワットのアップを念入りに始めていく。調子よさそうだ。

第一試技、322.5kg は重さを感じさせないスピードで立ちあがる。第二試技は 337.5kg を申請。セコンドの小早川選手の巻くタイミングもばっちり、337.5kg をいとも簡単に挙げる。膝の調子は本当に悪かったのかと思わせる素晴らしい動きをされていた。第三試技は日本記録となる 350kg を申請。ラックアウトは軽そうだったが、ボトムでバランスを崩してしまい立ちあがるができなかった。動きが良かっただけに残念だった。

この階級でもスクワットの世界記録が産まれた。面白かったのは先に行われた世界ジュニア選手権でウクライナの Rubets Oleksandr が 416kg の 105kg 級オープン世界記録を樹立したのだが、その Rubets がメインでセコンドに入っている選手 Semenenko Dmytro が自分の世界記録に挑戦しているという状況だ。Semenenko Dmytro は第二試技で 417.5kg の世界記録を樹立した。セコンドに付いている Rubets はどういう心境だったのだろうか？少し気になるところである。

ベンチプレスに入りここで児玉さんのアドバイス、重量選択の見極めが光った。255-262.5 と成功させたが第二試技少し挙がりがしづかった。第三試技はどうするかと悩んでいると客席から『267.5kg や！！』という声が聞こえた。児玉さんのアドバイスを信じ 267.5kg に向かう阿久津選手。粘ったすえに押し切り成功した。阿久津選手の粘りと重量選択が光った試技だった。

地元アメリカの選手 Conner Charles がベンチの第三試技で 323.5kg の世界記録に挑戦！地元アメリカの選手の時は大歓声！Conner は 323.5kg を軽々成功させ大歓声に答えた。

日本選手団の試技も残るは阿久津選手のデッドリフト三本となった。トータル日本記録を更新するには 310kg が必要。第一試技は軽めの 270kg、第二試技 290kg と成功する。セコンドの小早川選手と相談しトータルではなく、デッドリフトの日本記録を狙いで 305kg を申請。バーを引き出し膝上までは軽かったが無情にもバーはそこで止まってしまう引ききることはできなかった。トータルは 895kg で 12 位とした。

女子 83kg 超級で優勝したアメリカの Bonica はスクワット 297.5kg を軽がる立ち上がり会場を沸かした。彼女の凄さはなんとノーギアで 262.5kg のスクワットを立てているところだ。彼女はクラシックパワーのチャンピオンでもあり、フルギア、ノーギア共にチャンピオンとなった。

男子 120kg 級は 6 人が 1000kg を超えたハイレベルな戦いが繰り広げられた。優勝記録は 1125kg の大記録だった。120kg 超級はノルウェーのクリステンセンが一番に達成すると思われていたスクワット 500kg を先に叩きだしたアメリカの Sumner Blaine の一人旅立った。今回もスクワットの 500kg、ベンチの 400kg オーバーを期待したのだが残念ながら判定に泣かされ大記録を目の前で観ることができなかったのが残念だ。それでもトータル 1200kg をマークしベストリフター二位に選ばれた。

改めてパワーリフティングはチームスポーツだなと感じた。そして『面白い』という言葉に尽きる。沢山の方に助けていただいた。日本選手団の皆さまありがとうございました。来年の世界パワーに向けてまた頑張ります！

には破ることは出来ませんが、福島友佳子にとってまたひとつ大きな目標が出来ました。パワーリフティングは個人競技ですが、特に世界で戦う選手は自分の頑張りだけでなく、パワーリフティング協会をはじめ全国の皆様のご協力を頂いて、ハイレベルの戦いが出来ると思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

女子52キロ級 10位 酒巻 依子

SQ 155kg
BP 102.5kg
DL 155kg
T 412.5kg

今回は各種目ともベストの更新はなかったようですが、全日本が好調だったようなので、仕方なかったのかも知れません。調子が良くなかった時には、課題も見つかったと思います、こういう時は次に生かすチャンスです。このクラスは日本でも、強い選手がたくさんいます、これからも確実に記録を伸ばし続けてくださいね。



女子52キロ級 15位 赤川 智子

SQ 135kg
BP 95kg
DL 140kg
T 370kg



アサマトレーニングジムから初出場の女子選手が2名参加しました。

まずは、赤川選手です、彼女は一見のんびりしているように見えてましたが、試合時の姿や、終わった時の悔しがっている表情を見たときに、これからもどんどん強くなると感じました。

記録も全日本とほぼ同記録でしたが、初の世界の舞台では立派な記録だと思います。

ぜひ来年も出場権を獲得して頂き、世界でお会いしましょう。

女子57キログラム級 13位 加藤 幸枝

SQ 172.5 kg

BP 90 kg

DL 172.5 kg

T 435 kg

肩を痛めていたという話は聞いていましたが、終わってみれば8試技を成功させて、トータル435kg。ユッキーもベテランの試技になって来ましたね。デッドリフトのフォームを見ていたら、これからもどんどん伸びると思いました。今回のようにキッチリ成功試技を重ねていけば、トータルの日本記録も向こうから近づいて来ると思います。



女子57キログラム級 17位 淵上 宏恵

SQ 150 kg

BP 90 kg

DL 135 kg

T 375 kg



アサマトレーニングジムから初出場、女子選手のお二人目の登場。

淵上さんは仕事等でも世界を飛び回っているようですが、それは今後国際大会で活躍する為には絶対にプラスになると思います。

全日本の記録と比べて、スクワットとデッドリフトが伸びませんでしたが、大会を通して収穫はいっぱいあったと思います。今後の活躍を期待していますよ。

女子63キログラム級 5位 北村 真由美

SQ 190 kg

BP 173 kg

(MI世界記録)

DL 192.5 kg

T 555.5 kg

年の真由美さんは、十分にメダルを狙える位置にいましたが、スクワット、デッドリフトが伸びず、惜しい5位となりました。しかし、ベンチプレスでは世界記録の173kgに成功（その後、ソロビオバに更新されてし

まいました) これは素晴らしい記録です、このフォーミュラは日本人にはそう簡単には破られない記録だと思います
「パワーに真由美さん、ベンチにカオリさんがいるから、私も頑張ることが出来る」いつも友佳子は言っています
これからも怪我のないように皆さんの目標でいて下さいね。

男子59キロ級 6位 佐竹 優典

SQ 252.5kg

BP 160kg

DL 230kg

T 642.5kg

スクワットで252.5kgの日本記録、トータル642.5kgの自己ベストで堂々の6位、初出場とは思えない
試技でした、これからの大活躍が期待されます。





パワーハウスの竹花選手も頑張っています、「竹竹コンビ」で59kg級を引っ張って行って下さいね。そして久保君のセコンドありがとうございました

男子66キロ級 6位 佐藤 義宏

SQ 270kg
BP 220kg (世界新)
DL 240kg
T 730kg

表彰台を狙える力は充分にあり、特にベンチプレスでは220kgの世界記録を樹立しました。しかし全体では5試技の成功に終わり、悔しい6位となってしまいました。

本人は納得のいかない試合になったようですが、日本パワー男子では数少ないメダルを狙える選手の一人です。ベテランとなったサトキンのこれからの戦いが楽しみです。

試合後の1か月ぶりのお酒の味はどんな味になりましたか？



男子66キロ級 8位 鈴木 豪

SQ 247.5kg
BP 190kg
DL 275kg
T 712.5kg

世界パワー初出場の鈴木選手はスクワット以外ですべて自己ベストを更新という素晴らしい結果となりました。

得意のデッドリフトでは、なんと275kgで日本記録の更新となりました

E SQUATIR から強い選手が





育ってきました、サトキンと共に日本の66kg級を盛り上げて下さいね。

男子74キロ級 4位 濱田 展行

SQ 295kg

BP 225kg (MI世界記録)

DL 280kg

T 800kg

世界大会に強い濱ちゃんが800kg出しました。

全日本では悔しい終わり方で大谷選手に敗れたので、今回は本人としては嬉しい結果となったでしょう。

デッドリフトも280kgを引いたので、バランスの良い選手になりましたね

本人に握力はどんな方法で鍛えているのかと質問したところ、

「握力の握るやつをカチャカチャやってます」という濱ちゃんらしい答えでした。

まだまだ強くなりそうな、伸び盛りの濱田選手です。

男子74キロ級 5位 大谷 憲弘

SQ 307.5kg

BP 220kg

DL 265kg

T 792.5kg

毎年おなじみの濱田選手とのバトルが最終デッドリフトまで繰り広げられました。

大谷選手はデッドリフトの第3試技を濱田選手の792.5kgにかぶせて成功させ、体重差で暫定の4位に浮上しましたが、濱田選手も第3試技に成功させて残念ながら5位となりました

しかし得意のスクワットでは307.5kgの日本記録をきっちり更新しました。

今回はESQUATIRから66kg級の鈴木選手、女子52kg級に酒巻選手が出場するなど、大谷選手と合わせ3名が世界パワーに参加しました。

良い選手がどんどん育っています。





男子83キロ級 14位 小早川 渉

SQ 310 kg
BP 217.5 kg
DL 125 kg
T 652.5 kg

今回は調子が良いと聞いていましたが、スクワットの第2試技で右脚を痛めてしまいデッドリフトでは記録だけ残して終了しました。

とても悔しい結果となりましたが、早く治してリベンジして下さい。

小早川選手は今回、選手団のリーダーとして選手の皆さんの調整もして頂きました。ありがとうございました。

男子93キロ級 10位 久保 匡平

SQ 355 kg
BP 255 kg
DL 255 kg
T 865 kg

最近パラパワーリフティングで全国を飛び回っている久保選手ですが、今回は福島友佳子のセコンドに付いてくれ、久保選手自身のセコンドも佐竹選手に付いてもらった為、なかなか思うように自分の練習は出来なかったのではないのでしょうかその中でトータル日本記録の865 kgは立派だったと思います。

スクワットも良くしゃがんでいました、ただ強いだけではなくパワーハウスのコーチとして見本になる試技でした。

そしてプライベートな事ですが、久保くんおめでとうございます



男子105キロ級 12位 阿久津貴史

SQ 337.5kg

BP 267.5kg

DL 290kg

T 895kg

阿久津選手は、昨年まで15年連続で記録を更新続けてきたということでしたが、残念ながら今年は更新出来なかったとのことでした。

重量級は軽量級と比べて扱う重量が重い分、怪我のリスクも多くなりますが、日本人でトータル900kgを越える数少ない選手ですので、これからベテラン選手となっても長く記録を伸ばし続けて下さい。



男子ベストリフターは、ロシアの Fedosienko が昨年に引き続き1位となりました

女子ベストリフターは、昨年から一気に記録を伸ばしてきたウクライナの Soloviova が台湾のチェンを振り切って獲得しました

3位に福島友佳子が入りました



パワーハウスコーチ

久保匡平観戦記

今年の世界男女は 11/13-19、オランダ、USA で開催された。

今年の世界パワーは翌年に行われる 4 年に一度の大会「ワールドゲームズ」の選考会にあたるため、どの階級も各国の強豪たちが火花を散らす戦いが繰り広げられた。

また今回は喜ばしいニュースが二つ。

1 つは日本のウエイトトレーニング器具メーカーのザオバ (BULL) が IPF とスポンサー契約を結び、公認メーカーとなったこと。日本で行われる世界ベンチは BULL で行われるだろう。

もう一つは言わずと知れた日本が世界に誇るベンチプレス児玉大樹選手が IPF の『殿堂入り』をはたした。ベンチプレスでは初の快挙。

殿堂入りが決まったのは試合前日の IPF 総会。喜ばしい情報は SNS で発信されていたから沢山の人が知っていたと思うが、まさか本人が急遽オランダの会場まで来てしまうとは皆がビックリしたことだろう。さすがレジェンド児玉！今後の活躍も目が離せない。

男子 59 kg 級

日本の先陣を切ったのは若干 19 歳で全日本を優勝し世界パワー出場を決めた 59kg 級の佐竹優典選手 (関東学連、青山学院大学)。初の世界男子にもかかわらずあまり緊張した雰囲気は感じられずのびのびとしている印象を受けた。

ここ最近の試合では得意のスクワットの取りこぼしが多く、トータルを思うように伸ばせていなかったが、今回は違った。232.5-242.5-252.5 と一般の日本記録をマークした。幸先よいスタートだ！

ベンチプレスの第二試技に珍事件。バーをしっかりと受けて準備が整い、審判のスタートの合図がかかった。セコンド、日本選手団が見ている中、バーを降ろすのかと思いきや、ラックに返してしまった。見ている皆が、何があったのだ？と思っていたがすぐにフォームを組み直しベンチを開始、挙げ切ることができなかった。後から話を聞くと、審判の合図がリプレイスに聞こえたとのこと。

失敗の後、気持ちを切り替えて第三試技はきっちり成功した。147.5-157.5 × -160 でベンチプレスも自己ベストをマーク。

デッドリフトのフォームも改良され、三種目とも穴が無くなってきた。220-230-240 × で佐竹選手の初の世界男子は終了した。トータル 642.5kg で 6 位入賞。ジュニア日本新！とても素晴らしい結果だ。

優勝はロシアの Fedosienko Sergey で SQ290-BP205 (WR) -DL267.5、トータル 762.5kg で世界新を叩きだした

男子 66kg 級

この階級は昨年度までロシアが 2 名の選手を送り込んできていたが、今回はエントリーがなかった。どうやらロシアの男子選手は全階級で 2 名しか出場できないという制限を IPF から設けられたらしい。ロシアの選手の高重量を扱う試技が観られないのは残念だが、チャンスは俄然広がった。

日本からは全日本ベストリフターの佐藤義宏選手 (速太郎道場) と、全日本 2 位で全日本ジュニアベストリフターの鈴木豪選手 (ESQUATIR) の二名がエントリーした。

佐藤選手はノミネーションの順位が、ワールドゲームズの出場確定圏内の 3 位以内を十分に狙える位置に着けていた。

さてスクワット。佐藤選手は 2 本成功で 270kg。対する鈴木選手は第一試技を落としてヒヤヒヤしたが、第二、第三ときっちり決めて 247.5kg とした。

ベンチプレスでは鈴木選手がきっちり 3 本成功させて 190kg。佐藤選手は第一試技 215kgを決めて第二試技から 220kgの世界記録に挑戦！挙上途中に少し止まったように観えたが見事成功、世界記録樹立した！更なる更新を狙った第三試技の 222.5kgは押し切ったものの残念ながら失敗に終わった。

サブトータルの時点で佐藤選手が 3 位、鈴木選手が 9 位に着けている。佐藤選手はデッドリフトでどこまで逃げ切れるか注目だ。

しかしこの階級の上位陣はデッドリフトを得意としている選手が多い。少しでも重量を積み上げたいところ。第一試技の 240kgは難なく成功、しかし第二試技の 247.5kgが引ききれない。第三試技も引ききれず、トータル 730kgで試合を終えた。デッドリフトの強い海外の選手たちの追々を振り切ることができず、6 位となった。

鈴木選手はデッドリフトを得意としている。話を聞くとギアが 40 ～ 50kg効かせているとのこと。デッドスーツを 50kg効かせている選手はそうはいないだろう。そんな鈴木選手は第三試技で一般日本記録となる 275kgを成功させ、トータル 712.5kgとし 8 位でフィニッシュ。ジュニアを卒業しても是非続けて頂きたいと思う。

この階級の優勝者はしばらく優勝から遠ざかっていた台湾の Hsieh Tsung-Ting。SNS で動画を拝見していたが、今回の大会に向けて相当気合いが入っていた。その姿は試合当日の試技にも表れていた。感情を爆発させて喜んでいゝ Hsieh 選手を観るのは初めてだ

女子 47kg級

今回の世界パワーは全日程参加が義務付けられた。

日本が世界に誇るパワーリフター福島友佳子選手（パワーハウス）がエントリーしている。しかし毎年セコンドで帯同している御主人の福島和文さんが仕事の都合で全日程参加できず日本選手団に入ることができなかった。代わりに私、久保がセコンドにつかして頂いた。

世界二連覇と、ワールドゲームズの選考がかかった大事な試合、正直自分の試合より緊張していた。まずはスクワット、第一試技は絶対に落とせない。しかし私がミスをしてしまい、ラップの巻くタイミングを失敗して、第一試技を送り出してあげることができなかった。絶対にやってはいけないミスが一番大きな舞台でやってしまったのだ。頭が真っ白になってしまいそうだった。

しかし福島選手は焦るそぶりもみせず、「大丈夫」と声をかけてくれた。緊張が解れた同時にようやくいつもの自分が戻ってきた。

気を取り直し今度は巻くタイミングも大丈夫。第二試技を同重量の 172.5kgを成功させ、第三試技も 182.5kgをきっちり成功させた。

気持ちを切り替えてベンチプレスへ。練習では肘の調子が悪く、あまり良い調整はできていなかったが、勝負強さを発揮した。120-127.5-132 と三試技成功でオープンの世界記録を樹立した。

残りはデッドリフト。170kgを引けばトータルマスターズ 1 の世界記録だ。

第一試技の 150kgを軽く引いた。第二試技は 2 位を確定させるべく 162.5kgを選択。これもしっかりと引いてほぼ下から追ってくる選手を振り切った。第三試技は 170kg、これは重かった。膝位まで浮いてきたバーはそこで止まってしまった。トータル 477kgで銀メダル。福島選手の力を十二分に発揮させてあげられなかった事を反省するとともに、ワールドゲームズに向けてサポートしていこうと思う。

この階級の優勝は福島選手の最大のライバル、台湾のチェン。先日のリオオリンピックのウエイトリフティングにも出場していたが、そこでは 6 位と順位は振るわなかった。結果を挽回すべく SQ210 (WR) -BP105-DL185 でトータルなんと 500kg！！

ついに女子最軽量級で 500kgの壁を超えてしまった。もちろんトータル世界新。ベストリフター 2 位も獲得した。まだまだ福島選手とチェンの戦いは続きそうだ。

女子 52kg級

珍しく多数のエントリーがあり、ノミネーション下位 4 名ほどの選手は 47kgと一緒に周った。

この階級には酒巻依子選手（ESQUATIR）と赤川智子（アサマトレーニングクラブ）が出場した。初出場の赤川選手は福島選手と同じラウンドで周っていたが、非常に落ち着いて試技を行っているのが印象的だった。酒巻選手は試合中、すごく集中し周りに人を寄せ付けないようなオーラを放っているのが印象的だ。

赤川選手は SQ135-BP95-DL140、トータル 370kg で 15 位。酒巻選手は SQ155-BP102.5-DL155、トータル 412.5 kg で 10 位だった。

この階級ベネゼエラの Dominguez Maria がジュニアの年齢にしてベンチプレスのオープン世界新なる 145kg をマークし、ロシアの Salnikova Natalia に迫る勢いだったが、そこは女王、終わってみると大差をつけて優勝していた。これにて一日目が終了した。

二日目、女子 57kg 級

寺田幸枝選手（TXP）と渕上宏恵選手（アサマトレーニングクラブ）の 2 名がエントリー。

寺田選手は今年の全日本パワー後、肩の腱板が断裂と関節唇の損傷が発覚し、フォーム改善をよぎなくされたと聞いていた。半年のフォーム改善でどこまで記録を出せるか注目していた。渕上選手は初出場、試技を観るのは初めてだ。そんな渕上選手、試合中を淡々とこなしていっている。緊張していないのだろうか？と思う位に表情が変わらない。後から、聞いてみると、結構緊張していたとのこと！全然そんな風には見えなかった。記録は SQ150kg -BP90-DL135、トータル 375kg 17 位。

寺田選手はフォームが改善され、取りこぼしの多かったスクワットで見事 3 本成功し 172.5kg の自己ベストをマーク。肩の不調が心配で BP は軽めからスタートしこちらも終わってみれば 3 本成功の 90kg。得意のデッドリフトは第三試技を落としてしまったが、全て終わってみると 8 本成功、トータル 435kg とし 13 位という結果を残した。肩の調子を戻し、来年は万全の状態挑戦で頂きたい。

男子 74kg 級

日本からは 2 名が出場。濱田展行選手（個人）と大谷憲弘選手（ESQUATIR）。

国内大会から熾烈な争いを繰り広げている濱田選手と大谷選手、二人の対決にも注目して観戦していた。

濱田選手のメインセコンドに付いたのは、今回の日本選手団を縁の下から支えてくださった、速太郎道場所属の本宮さん。国内にいるときから綿密に連絡を取り合い準備してこられたとの事。本宮さんは自作でラップ巻きの練習の為に疑似足を作成し練習するほど熱心に取り組んでこられたと聞いた。本当に熱い方だと思う。

話は試合に戻りスクワット開始。両選手とも得意としている種目で、日本記録を保持しているのは濱田選手。第一試技、濱田選手は 280kg を選択。ラックアウトの瞬間から様子がおかしい。バーベルをきっちり受けることができていない。不安定なまま何とか構えてスクワットの合図をもらったが、フィニッシュまで立ちあがることができない。濱田選手は先に行われた世界マスターズ選手権にも出場していたが、スクワットで失格してしまっていた。不安がよぎる。むかえた第二試技、ラックアウトの動きが良い！合図とともにしゃがんでいき軽く立ちあがった。見事成功！！日本選手団全員がホッとした。第三試技はなんと 15kg アップの 295 を申請。この重量も白二本をもぎ取り成功させた。第一試技は何だったのだ？後から聞くとラックの設定が高すぎて抜けなかったそう。パワーリフティングを新たに始めた方々もラックの高さ調整がいかに大切か考えてほしいと思う。

一方の大谷選手。スクワットは強いのだが心配ごとは深さが入るかどうか。第一試技の 290kg を軽く成功させ、第二試技は日本記録となる 307.5kg を申請。この重量も成功させて日本記録を樹立。第三試技は 3 位狙いの 312.5kg を申請したがこの重量は立つことができず失敗に終わった。

スクワットが強烈な Olech Jaroslaw が 367.5kg の M1 世界記録を成功させ会場が湧いた。

ベンチプレスに入りまたも濱田選手が第一試技 215kg を落とす。しかし第二試技は同重量を成功させ、第三試技では M 1 世界記録となる 225kg を成功させ、銀メダルを獲得。

大谷選手は第一試技 220kg を成功させ、第二、第三試技は 230kg を落としてしまい一本のみの成功となった。

デッドリフトに入り濱田選手、大谷選手、ベネズエラの La Rosa Lenin の三人で 4 位争い。

順位を少しでも上げてワールドゲームズの選考を有利にしたいところ。

サブトータルは濱田選手が 520kg、大谷選手が 527.5kg と優勢。第一試技は大谷選手が 240kg 成功、濱田選手は

260kgを成功させ大谷選手に逆転。第二試技、大谷選手は 250kgを無難に成功。濱田選手は 272.5kgを申請しこれを引けば 792.5kgになり一般のトータル日本記録になる。これを難なく引ききる！成功だ！第三試技は 280kgを申請する。

大谷選手も黙ってはいない。第三試技は濱田選手を体重差でかわすべく 265kgを申請した。集中し引き始めるとバーは浮いてきたが、膝上を越えたあたりから苦しい！苦しいがジワジワ返ってきてフィニッシュ。判定は？固唾を呑んで見守る。白2、赤1で成功！濱田選手に逆転し後は待つばかり。順位を意識した試合運びするのであれば、濱田選手は 275kgを申請するだろう。観客席で見ていた日本選手団の皆が口にしていたが、なんと 280kgのまま行くというのだ。74kg級でトータル 800kgの太台に乗せることを選択したのだ。

太台に乗せるべくプラットフォームへ。スタンスを決めてバーを握り、腰を落として引き始める。バーは止まることなくフィニッシュまで一気に引ききった。判定は見事成功！！

濱田選手とセコンドの本宮さんに笑顔がこぼれたのが印象的だった。濱田選手トータル 800kgで今回の世界パワーで男子日本人最高順位の 4 位、大谷選手は 5 位でワールドゲームズの選考の可能性に大きく望みをつないだ。このクラスの優勝はもちろん Olech Jaroslaw で 895kgだった。

3 日目

この日は男子 83kg級、女子 63kg級、男子 93kg級と長丁場の一日となった。

また冒頭でも述べたが、ベンチプレス界のレジェンド、児玉大樹選手が到着した日でもある。

男子 83kg級

3 日目の先陣は日本選手団のリーダーである小早川渉選手（速太郎道場）の登場。

スクワットはピーキングで昨年の世界パワーで記録した 322.5kgを安定して立たれていたのを拝見している。スクワットの第一試技は 310kgを申請。気合いの入った小早川選手が登場しバーベルを担ぐ。しかし上手く担げない。一度前にバランスを崩し、再度担ぎ直し合図をもらう。しかししゃがんでいる最中にラックに当たってしまい失敗。

第二試技は同重量を選択。担ぎは安定しているように見えた。深さを入れて立ちあがる。途中ぶれる場面があったが白二つで成功。あれ？様子がおかしい。歩くのが痛そうだ。セコンドの佐藤選手が抱えに行っていた。第三試技がパスの表示。嫌な予感がする。

どうやらしゃがんでいる最中に右の内側広筋を肉離れしてしまったようだ。

しかしベンチプレスも行い 217.5kg、デッドリフトも踏ん張りが効かないためスティフデッドで 125kgを引いて完走した。練習をしっかりとやり込めていたと語っていただけに本当に悔しいと思う。トータル 652.5kgで 14 位。肉離れを治し、来年の世界パワーで爆発してほしいと願う。

女子 63 kg級

2 位まで大混戦が予想される階級。勿論日本の北村真由美選手にもチャンスがある。

筆者はこの後に自分の試合を控えているので部屋でユーストリーム観戦。

スクワット開始。第一試技の 190kgを軽々成功。第二試技は 200kgを軽く立つもしゃがみが浅い判定。第三試技も同様しゃがみが浅くて失敗。競っている試合で二本落とすのは痛い。この階級の絶対女王ウクライナの Soloviova Larysa が 241kgの世界新を打ち立てた。去年は膝？を痛めていたのか元気無かったが今年は違った。

北村選手の得意種目である、ベンチプレス。狙うはオープンの世界記録！

しかし、世界記録を狙う選手が他にも二名。一人は絶対女王 Soloviova Larysa、もう一人は今年の世界ベンチで 184kgのシングルの世界記録をマークしたドイツの Von Bchhaus Gundula Fiona だ。北村選手を含め、三人のスタート重量は 160kg。

三人とも第一試技を成功。第二試技は北村選手が 167.5kg(M1、WR)を、Soloviova が 170kg、Fiona が 172kg(WR)を成功し世界記録が 172kgとなった。オープンの世界記録を狙いに来ていた北村選手は 173kgを申請。セコンドの浅間先生に送り出され、ベンチ台に向かう。しっかりフォームを組みバーベルをラックアウト。胸に着けて一気

に押し上げる！少し傾いたか、判定は？白二つで見事オープンの世界記録を樹立した。喜びを爆発させる北村選手。しかし今回の Soloviov は強かった。第三試技で 180kg を成功させ、先ほど北村選手が樹立した記録を超えてしまった。一体同じくらいの体重の男子で何人が彼女に勝てるのだろうか？ドイツの Fiona も体重差でベンチの金メダルを狙うべく 180kg にチャレンジしたが挙げることができなかった。

残るデッドリフト、北村選手は第一試技 182.5kg、第二試技 192.5kg と成功させた。第三試技の 202.5kg はフィニッシュが返らず失敗に終わった。トータルは 555.5kg で順位はスクワットの取りこぼしがひびき 5 位となった。試合後来年はベンチの世界記録を更新するとおっしゃっていたので来年は女子で 180 オーバーのベンチプレスが観られるかもしれない。

男子 93 級

日本からは筆者、久保匡平（パワーハウス所属）がエントリー。

セコンドに付いてくれた佐竹選手とはピーキングを合わせてもらい、しっかり調整することができた。

今回の目標は 93kg トータル日本記録更新である。

検量待ちをしているとき、レジェンド児玉大樹さんが会場に到着された。『めっちゃ応援するから頑張れよ』と声をかけてくれた。

検量後の栄養補給を終えて、スクワットのアップ開始。動きは悪くない。アップを進めていく中で日本選手団が裏まで応援に来てくださった。皆に見守られ最終アップの 310kg を担ごうとベルトを締めようとした時、なんとレバーアクションのバックルが折れてしまった。幸い締める分には問題なさそうだがやはり怖い。そんな時機転を利かしてくれた佐藤選手がタイタンのブースからバックルを購入し届けてくれた。またベルトのバックルを児玉さんが付け替えてくれた。本当に感謝しかない。この場を借りてお礼申し上げたい。ありがとうございます。

佐藤選手、児玉さんのおかげでスクワットの第一試技へむかえる。

93kg 級は A と B のグループに分かれており、私は A グループ、7 人で周ることとなった。第一試技は 330kg を申請。佐竹選手の巻きはバッチリで難なく成功。第二試技は 345kg を申請。7 人なのであまり休憩している暇はない。がなんと一人パスしてしまい 6 人に減ってしまった。すぐさまセコンドの佐竹選手に呼ばれ巻いてもらう。巻きは完璧で 345kg を成功することができた。少しフィニッシュでスピードが落ちた。重量選択で悩んだ末、355kg の自己タイ記録を申請した。休憩する間もなくすぐに巻いてもらう。気合いを入れてバーベルを担ぐ。スタンスを決めるとき右の膝がカクツとなり、バランスを崩したが何とか気合いで持ち直し、そして立ちあがった。久々に 355kg を成功することができた。実に 4 年ぶりである。スクワットの粘り強さに定評があるウクライナの Bilyi Sergii は、第三試技で 395.5kg をチャレンジし失敗したものの、会場を大いに沸かした。

ベンチプレスの調子が良くない。練習の時からムラがあり何とか形になったという感じだった。スタート重量は予定より 5kg 下げて 245kg にした。これは難なくクリア。世界の児玉さんが激を飛ばしてくれているのがよく聞こえた。第二試技は 255kg、少し粘ったが成功。第三試技は 262.5kg を選択した。第二試技より反発はあったが途中でバーが下がってしまい失敗に終わった。ベンチプレスではポーランドの Wegiera Jan が 305kg を成功させオープンの世界記録を樹立した。M 2 になっても記録を伸ばし続けているのが本当に脱帽だ。

サブトータルは 610kg、トータル日本記録更新にはデッドリフトで 255kg が必要だ。

第一試技は 240kg グリップも問題なく引ききる。成功だ。第二試技は一気に 255kg 申請し引いて日本記録更新を狙う。バーを握り一気に引ききる。無事成功しトータル日本記録は更新できた。残るは第三試技でもう少しトータルを伸ばしたい。260kg を申請しこれを引ききれず失敗。トータル 865kg で 10 位という結果となった。

93kg 級のトップは昨年同様ウクライナの Bilyi Sergii で 1012.5kg だった。

この階級で上位入賞するには 900 後半は必要になってきた。世界との差は中々埋まらない。

私の試合を持って 3 日目が終了した。残るは一人のみとなった。

4 日目

11 月 26. 27 日にジャパクラシックベンチを控えている児玉選手（筆者もエントリーしていた）が朝から練習をするという事で見学と補助をしに行った。

そこではスーパーヘビー級の選手(勿論試合は終わっていない)や軽量級の選手達が早くも体を動かしに来ていた。試合後なのに早々と練習とはどんな体をしているのだろうか？

話を戻して、児玉選手のベンチプレスは 170kg で動きのチェックをしている。そんな姿を外国のパワーリフター達は興味津々に観察している。中には至近距離で動画を撮影しだす。写真を一緒に撮って欲しいと頼まれることもしばしば、流石日本が誇るベンチプレスマシーン（ウクライナの選手が命名）児玉さん。スターは大変だ！

そうこうしている間に日本人最後の選手である阿久津貴史選手（TXP 所属）の試合が始まろうとしていた。その前に女子 72kg 級が行われ、毎年のように繰り広げられるアメリカの Ribic とブラジルの Ana が接戦を繰り広げた。サブトータルで Ana がリードし、デッドの強い Ribic が一気にまくれるかが毎年の見どころ。今回は Ana がトータル 638kg で優勝、Ribic は逆転をかけたデッドを引ききれず 632.5kg で二位となった。

男子 105kg 級

膝の調子がずっと良くなかったと話す阿久津選手だったが、ベテランらしくきっちりコンディションを合わせられたみたいだ。スクワットのアップを念入りに始めていく。調子よさそうだ。

第一試技、322.5kg は重さを感じさせないスピードで立ちあがる。第二試技は 337.5kg を申請。セコンドの小早川選手の巻くタイミングもばっちり、337.5kg をいとも簡単に挙げる。膝の調子は本当に悪かったのかと思わせる素晴らしい動きをされていた。第三試技は日本記録となる 350kg を申請。ラックアウトは軽そうだったが、ボトムでバランスを崩してしまい立ちあがるができなかった。動きが良かっただけに残念だった。

この階級でもスクワットの世界記録が産まれた。面白かったのは先に行われた世界ジュニア選手権でウクライナの Rubets Oleksandr が 416kg の 105kg 級オープン世界記録を樹立したのだが、その Rubets がメインでセコンドに入っている選手 Semenenko Dmytro が自分の世界記録に挑戦しているという状況だ。Semenenko Dmytro は第二試技で 417.5kg の世界記録を樹立した。セコンドに付いている Rubets はどういう心境だったのだろうか？少し気になるところである。

ベンチプレスに入りここで児玉さんのアドバイス、重量選択の見極めが光った。255-262.5 と成功させたが第二試技少し挙がりがしづかった。第三試技はどうするかと悩んでいると客席から『267.5kg や！！』という声が聞こえた。児玉さんのアドバイスを信じ 267.5kg に向かう阿久津選手。粘ったすえに押し切り成功した。阿久津選手の粘りと重量選択が光った試技だった。

地元アメリカの選手 Conner Charles がベンチの第三試技で 323.5kg の世界記録に挑戦！地元アメリカの選手の時は大歓声！Conner は 323.5kg を軽々成功させ大歓声に答えた。

日本選手団の試技も残るは阿久津選手のデッドリフト三本となった。トータル日本記録を更新するには 310kg が必要。第一試技は軽めの 270kg、第二試技 290kg と成功する。セコンドの小早川選手と相談しトータルではなく、デッドリフトの日本記録を狙いで 305kg を申請。バーを引き出し膝上までは軽かったが無情にもバーはそこで止まってしまう引ききることはできなかった。トータルは 895kg で 12 位とした。

女子 83kg 超級で優勝したアメリカの Bonica はスクワット 297.5kg を軽がる立ち上がり会場を沸かした。彼女の凄さはなんとノーギアで 262.5kg のスクワットを立てているところだ。彼女はクラシックパワーのチャンピオンでもあり、フルギア、ノーギア共にチャンピオンとなった。

男子 120kg 級は 6 人が 1000kg を超えたハイレベルな戦いが繰り広げられた。優勝記録は 1125kg の大記録だった。120kg 超級はノルウェーのクリステンセンが一番に達成すると思われていたスクワット 500kg を先に叩きだしたアメリカの Sumner Blaine の一人旅立った。今回もスクワットの 500kg、ベンチの 400kg オーバーを期待したのが残念ながら判定に泣かされ大記録を目の前で観ることができなかったのが残念だ。それでもトータル 1200kg をマークしベストリフター二位に選ばれた。

改めてパワーリフティングはチームスポーツだなと感じた。そして『面白い』という言葉に尽きる。沢山の方に助けていただいた。日本選手団の皆さまありがとうございました。来年の世界パワーに向けてまた頑張ります！

World Open Men's Championships, Orlando (U.S.America), 14-20.11.2016

資料IPFホームページより

男子の部

-59kg

1	Fedosienko Sergey	1982	RUS	58,49	290,0	205,0	267,5	762,5	665,82
2	Espinoza Tirso	1990	VEN	58,73	240,0	167,5	262,5	670,0	582,83
3	Leon Franklin	1983	ECU	58,53	270,0	172,5	225,0	667,5	582,53
4	Lin Yi-Chun	1994	TPE	58,74	247,5	160,0	255,0	662,5	576,18
5	Wszola Dariusz	1978	POL	58,50	262,5	180,0	217,5	660,0	576,25
6	Satake Yusuke	1996	JPN	58,79	252,5	160,0	230,0	642,5	558,40
7	Wang Chun-Lin	1990	TPE	58,24	250,0	150,0	240,0	640,0	561,09
8	Tran Christopher	1988	USA	58,75	240,0	152,5	245,0	637,5	554,37
9	Cancel Ivan	1982	PUR	58,37	237,5	165,0	232,5	635,0	555,56
10	Gomez Walter	1989	ECU	57,03	230,0	160,0	230,0	620,0	554,53
11	Guido Wilhem	1974	MEX	57,96	200,0	130,0	210,0	540,0	475,58
12	Maia Jonatas	1992	BRA	58,56	192,5	127,5	215,0	535,0	466,63

-66kg

1	Hsieh Tsung-Ting	1982	TPE	65,67	287,5	215,0	282,5	785,0	618,89
2	Okpoko Charles	1995	USA	65,74	307,5	200,0	257,5	765,0	602,67
3	Savolainen Antti	1978	FIN	65,80	262,5	200,0	300,0	762,5	600,24
4	El Belghiti Hassan	1975	FRA	65,40	290,0	165,0	305,0	760,0	601,24
5	Ochoa Alex	1990	ECU	65,99	275,0	197,5	260,0	732,5	575,23
6	Sato Yoshihiro	1982	JPN	65,70	270,0	220,0	240,0	730,0	575,31
7	Grotkowski Mariusz	1989	POL	65,22	265,0	210,0	250,0	725,0	574,92
8	Suzuki Go	1994	JPN	65,48	247,5	190,0	275,0	712,5	563,09
9	Pisasale Salvatore	1980	ITA	65,52	265,0	200,0	230,0	695,0	548,98
10	Garcia Carlos	1980	VEN	59,38	255,0	162,5	247,5	665,0	572,57
11	Soria Fernando	1983	ECU	65,60	265,0	172,5	225,0	662,5	522,78
12	Noppers Lewis	1970	CAN	65,84	245,0	150,0	260,0	655,0	515,35
13	Kuan Yi-Hsin	1982	TPE	64,92	225,0	142,5	280,0	647,5	515,41
—	Lima Eudson	1985	BRA	65,35	267,5	160,0	—	DSQ	—

-74kg

1	Olech Jaroslaw	1974	POL	73,14	367,5	217,5	310,0	895,0	649,23
2	Barannik Mykola	1989	UKR	73,64	325,0	232,5	280,0	837,5	604,51
3	Prokopenko Andrey	1988	KAZ	73,22	315,0	222,5	295,0	832,5	603,40
4	Hamada Nobuyuki	1969	JPN	73,56	295,0	225,0	280,0	800,0	577,92
5	Otani Norihiro	1980	JPN	72,92	307,5	220,0	265,0	792,5	576,07
6	La Rosa Lenin	1985	VEN	73,06	297,5	205,0	290,0	792,5	575,28
7	Walton Nathan	1976	USA	73,84	277,5	180,0	302,5	760,0	547,50
8	Lin Ming-Hui	1983	TPE	72,87	285,0	210,0	250,0	745,0	541,84
9	Kailey Pardeep	1983	NED	73,92	265,0	185,0	280,0	730,0	525,53
10	Lkhamjav Ganbaatar	1990	MGL	73,68	230,0	225,0	230,0	685,0	494,23
11	Murray William	1981	GBR	72,84	235,0	162,5	222,5	620,0	451,05

-83kg

1	Rysiyev Volodymyr	1982	UKR	82,82	345,0	257,5	325,0	927,5	619,94
2	Naniev Andriy	1984	UKR	82,70	337,5	265,5	307,5	910,5	609,03
3	Ramzy Adam	1990	CAN	82,51	347,5	245,0	307,5	900,0	602,91
4	Douglas Paul	1989	USA	82,69	352,5	215,0	310,0	877,5	587,05
5	Turakhanov Davranbek	1974	KAZ	82,24	322,5	222,5	312,5	857,5	575,55
6	Curth Vincent	1991	GER	82,80	350,0	230,0	270,0	850,0	568,23
7	Roelvaag Kim-Raino	1986	NOR	80,19	310,0	255,0	282,5	847,5	577,74
8	Del Lama Marcelo	1984	BRA	82,87	305,0	260,0	282,5	847,5	566,22
9	Spychala Jacek	1978	POL	82,70	317,5	207,5	315,0	840,0	561,88
10	Lochschmidt Max	1983	GER	82,64	305,0	212,5	300,0	817,5	547,07
11	Sanchez Marcos	1974	ECU	83,00	305,0	220,0	270,0	795,0	530,66
12	Jhang You-Si	1994	TPE	82,45	275,0	177,5	327,5	780,0	522,68
13	Sanasi Simone	1982	ITA	82,62	295,0	190,0	270,0	755,0	505,32
14	Kobayakawa Wataru	1975	JPN	82,32	310,0	217,5	125,0	652,5	437,70
—	Bolivar Wilffen	1991	VEN	74,11	300,0	187,5	—	DSQ	—
—	Miloch Tomasz	1983	POL	77,09	—	—	—	DSQ	—
—	Vicenteno Ricardo	1983	MEX	81,51	—	165,0	295,0	DSQ	—

-93kg

1	Bilyi Sergii	1990	UKR	92,35	387,5	277,5	347,5	1012,5	638,18
2	Inzarkin Dmitry	1987	RUS	91,55	365,0	285,0	340,0	990,0	626,67
3	Bell Ian	1992	USA	92,10	352,5	222,5	370,0	945,0	596,39
4	Stendebach Sascha	1991	GER	92,46	332,5	270,0	342,5	945,0	595,26
5	Wegiera Jan	1965	POL	92,67	350,0	305,0	280,0	935,0	588,40
6	Coimbra David	1983	BRA	92,42	345,0	252,5	300,0	897,5	565,51
7	Smagulov Yerlan	1994	KAZ	92,04	340,0	240,0	315,0	895,0	565,01
8	Yarullin Ruslan	1982	KAZ	92,81	345,0	250,0	300,0	895,0	562,78
9	Myagmarsuren Galsaikhan	1988	MGL	92,56	360,0	232,5	300,0	892,5	561,92
10	Kubo Kyohei	1987	JPN	92,53	355,0	255,0	255,0	865,0	544,69
11	Masahito Kitsui	1978	HKG	92,38	220,0	272,5	240,0	732,5	461,62

12	Matarrita Montenegro Cristian	1984	CRC	91,46	285,0	155,0	250,0	690,0	436,98
13	Kodikara Dhanushka	1992	SRI	92,47	240,0	160,0	250,0	650,0	409,44
—	Bast Jan	1977	GER	91,93	330,0	—	—	DSQ	—
—	Gonzalez Aaron	1989	VEN	93,00	355,0	—	—	DSQ	—

-105kg

1	Semenenko Dmytro	1988	UKR	103,49	417,5	272,5	332,5	1022,5	614,22
2	Belkesir Sofiane	1984	FRA	104,32	385,0	272,5	342,5	1000,0	598,90
3	Conner Charles	1989	USA	104,24	380,0	323,5	282,5	986,0	590,71
4	Eikeland Kristoffer	1989	NOR	103,85	350,0	292,5	330,0	972,5	583,40
5	Van den Hoek Piotr	1972	NED	104,59	362,5	295,0	315,0	972,5	581,94
6	Yang Sen	1994	TPE	104,80	395,0	262,5	300,0	957,5	572,59
7	Lange Martin	1987	GER	104,60	367,5	257,5	315,0	940,0	562,50
8	Perez Edgar	1981	VEN	98,57	350,0	300,0	280,0	930,0	569,35
9	Van Heesvelde Jeroen	1990	BEL	104,60	347,5	250,0	325,0	922,5	552,02
10	Mencias Jose	1987	VEN	99,19	360,0	245,0	315,0	920,0	561,75
11	Shuurai Chanrav	1989	MGL	99,93	325,0	300,0	270,0	895,0	544,88
12	Akutsu Takahito	1982	JPN	100,49	337,5	267,5	290,0	895,0	543,62
13	Kangasvieri Jussi	1987	FIN	104,80	337,5	237,5	300,0	875,0	523,25
14	Shagdarsuren Batzul	1982	MGL	104,67	345,0	225,0	275,0	845,0	505,48
15	Vieira Rudi	1983	BRA	95,15	315,0	255,0	265,0	835,0	519,04
16	Prasek Jiri	1989	CZE	102,03	305,0	245,0	245,0	795,0	480,02
—	Martinez Nelson	1986	ECU	100,88	—	250,0	290,0	DSQ	—
—	Schollbach Mike	1981	GER	103,03	—	—	—	DSQ	—
—	Walgermo Stian	1988	NOR	104,66	387,5	—	345,0	DSQ	—

-120kg

1	Bychkov Oleksiy	1985	UKR	118,25	422,5	327,5	375,0	1125,0	649,01
2	Yeshmakhanov Nurlan	1990	KAZ	116,16	417,5	300,0	372,5	1090,0	631,65
3	Rokochiy Oleksiy	1981	UKR	119,82	425,0	307,5	357,5	1090,0	626,86
4	Jaeger Kevin	1995	GER	119,97	400,0	355,0	305,0	1060,0	609,50
5	Sarik Tomas	1975	CZE	119,35	375,0	270,0	355,0	1000,0	575,70
6	Samuelsson Viktor	1993	ISL	119,60	375,0	307,5	317,5	1000,0	575,40
7	Snijders Jordy	1986	NED	119,54	372,5	312,5	305,0	990,0	569,65
8	Rivera Carlos	1982	PUR	118,75	372,5	270,0	322,5	965,0	556,13
9	Kasperek Gernot	1975	AUT	119,96	335,0	302,5	292,5	930,0	534,75
10	Tubiniezh Ronald	1986	VEN	111,41	350,0	245,0	325,0	920,0	539,30
11	Macdonald John	1983	CAN	119,90	340,0	282,5	290,0	912,5	524,69
12	Ramirez Jose	1990	MEX	117,57	290,0	235,0	247,5	772,5	446,35
13	Jayathilake Ransilu	1986	SRI	115,02	292,5	157,5	310,0	760,0	441,56
14	Singh Ishar	1963	IND	106,18	175,0	160,0	150,0	485,0	288,72
—	Tilyeubayerd Saifolla	1987	MGL	110,80	—	240,0	310,0	DSQ	—
—	Bataa Chimedtseren	1981	MGL	118,41	—	322,5	250,0	DSQ	—
—	Campos Murillo Carlos Manuel	1979	CRC	119,02	—	240,0	342,5	DSQ	—
—	Bilican Orhan	1978	BEL	119,72	—	—	—	DSQ	—

120+kg

1	Sumner Blaine	1987	USA	170,62	465,0	385,0	350,0	1200,0	651,36
2	Cappellino Joseph	1988	USA	167,44	455,0	335,0	345,0	1135,0	617,89
3	Lupac David	1991	CZE	146,44	435,0	332,5	330,0	1097,5	609,33
4	Testsov Viktor	1989	UKR	135,03	420,0	340,0	330,0	1090,0	612,58
5	Johannsson Julian J.K.	1993	ISL	161,43	385,0	305,0	380,0	1070,0	585,83
6	Valach Robert	1992	SVK	132,64	402,5	275,0	360,0	1037,5	584,74
7	Sandvik Kenneth	1975	FIN	141,45	390,0	347,5	300,0	1037,5	578,92
8	Ringoot Steve	1989	BEL	145,28	382,5	282,5	320,0	985,0	547,46
9	Martikainen Jari	1975	FIN	144,43	375,0	245,0	360,0	980,0	545,17
10	Stinn Ryan	1981	CAN	141,50	385,0	275,0	295,0	955,0	532,79
11	Souza Eumenes	1972	BRA	151,49	375,0	262,5	305,0	942,5	520,73
—	Kondraschow Jewgenij	1983	GER	140,67	—	—	340,0	DSQ	—
—	Baartvedt Hans Magne	1983	NOR	172,31	—	335,0	340,0	DSQ	—

Nation (points)

1.	Ukraine	57	[12+12+12+12+9]	3130,38 w.pts.
2.	U.S.America	46	[12+9+9+8+8]	3059,02 w.pts.
3.	Chinese Taipei	31	[12+7+5+4+3]	2870,58 w.pts.
4.	Poland	30	[12+6+6+4+2]	2950,68 w.pts.
5.	Kazakhstan	30	[9+8+6+4+3]	2938,40 w.pts.
6.	Japan	26	[7+6+5+5+3]	2850,79 w.pts.

Best Lifters of Open

Rnk	Lifter	Nation	B.Weight	WF	Total	W.Points	C.Rnk.
1	Fedosienko Sergey	Russia	58,49	0,8732	762,5	665,82	1
2	Sumner Blaine	U.S.America	170,62	0,5428	1200,0	651,36	1
3	Olech Jaroslaw	Poland	73,14	0,7254	895,0	649,23	1

女子の部

-47kg

1	Chen Wei-Ling	1982	TPE	46,75	210,0	105,0	185,0	500,0	675,05
2	Fukushima Yukako	1970	JPN	46,72	182,5	132,0	162,5	477,0	644,28

3	Vasquez Maria Luisa	1983	PUR	46,18	185,0	105,0	162,5	452,5	616,26
4	Komalasari Eka	1990	INA	46,74	180,0	75,0	175,0	430,0	580,63
5	Duno Frankmary	1987	VEN	46,99	170,0	107,5	152,5	430,0	578,39
6	Hudson Allegra	1994	USA	46,80	145,0	82,5	162,5	390,0	526,11
7	Huang Hui-Chuan	1996	TPE	46,40	112,5	72,5	167,5	352,5	478,45

-52kg

1	Salnikova Natalia	1986	RUS	51,92	195,0	132,5	185,0	512,5	639,65
2	Dominguez Maria	1995	VEN	51,90	185,0	145,0	155,0	485,0	605,52
3	Klymenko Kateryna	1985	UKR	51,57	187,5	117,5	175,0	480,0	602,21
4	Vermenjuk Valentina	1986	RUS	51,67	185,0	112,5	170,0	467,5	585,68
5	Puddicome Steph	1986	CAN	51,33	177,5	97,5	175,0	450,0	566,64
6	Martin Vanessa	1976	FRA	51,59	175,0	100,0	165,0	440,0	551,89
7	Najera Juanita	1981	USA	51,36	157,5	100,0	165,0	422,5	531,76
8	Bagger Trine	1986	DEN	51,72	160,0	95,0	165,0	420,0	525,76
9	Felinska Olimpia	1992	POL	50,71	175,0	90,0	147,5	412,5	524,25
10	Sakamaki Yoriko	1990	JPN	51,25	155,0	102,5	155,0	412,5	520,04
11	Shlopko Tetyana	1996	UKR	51,43	160,0	100,0	150,0	410,0	515,49
12	Monaco Roberta	1975	ITA	51,67	152,5	82,5	157,5	392,5	491,72
13	Baez Frances	1988	PUR	51,50	147,5	80,0	160,0	387,5	486,70
14	Chou Yi-Ju	1980	TPE	51,14	130,0	70,0	185,0	385,0	486,14
15	Akagawa Tomoko	1984	JPN	51,72	135,0	95,0	140,0	370,0	463,17
16	Edwards Louise	1978	GBR	51,43	140,0	75,0	145,0	360,0	452,63
17	Rico Jessica	1983	MEX	51,92	127,5	85,0	130,0	342,5	427,47

-57kg

1	Sri Hartati	1984	INA	56,28	205,0	146,0	192,5	543,5	636,98
2	Ryzhkova Anna	1986	RUS	56,67	205,0	135,0	195,0	535,0	623,65
3	Karlysheva Victoria	1993	RUS	56,92	207,5	130,0	190,0	527,5	612,80
4	Wu Hui-Chun	1986	TPE	56,60	195,0	135,0	195,0	525,0	612,57
5	Lopez Rowena	1977	USA	56,52	185,0	137,5	197,5	520,0	607,41
6	Ochoa Vargas Vilma	1980	ECU	55,79	222,5	115,0	180,0	517,5	610,70
7	Ruiz Egdimar	1991	VEN	54,58	190,0	115,0	205,0	510,0	612,25
8	Monserrate Kenia	1991	ECU	55,78	205,0	100,0	195,0	500,0	590,10
9	Steel Ellie	1991	GBR	56,46	187,5	135,0	160,0	482,5	564,09
10	Barbosa Irani	1986	BRA	56,26	187,5	107,5	172,5	467,5	548,05
11	Haugen Mikkelsen Hilde	1991	NOR	56,71	192,5	120,0	152,5	465,0	541,73
12	Blummenfelt Kine	1991	NOR	56,63	185,0	97,5	170,0	452,5	527,75
13	Terada Yukie	1974	JPN	56,21	172,5	90,0	172,5	435,0	510,34
14	Wildeman Sandra	1979	NED	56,78	172,5	102,5	160,0	435,0	506,30
15	Chou Chien-Yu	1982	TPE	56,29	150,0	90,0	187,5	427,5	500,99
16	Buxbom Eva	1969	DEN	56,23	165,0	75,0	177,5	417,5	489,64
17	Fuchigami Hiroe	1967	JPN	55,10	150,0	90,0	135,0	375,0	446,85
18	Patel Nidhi Singh	1990	IND	55,04	120,0	80,0	135,0	335,0	399,56

-63kg

1	Soloviova Larysa	1978	UKR	62,99	241,0	180,0	220,0	641,0	688,50
2	Tavares Cicera	1976	BRA	62,63	227,5	130,0	217,5	575,0	620,31
3	Adamovich Olga	1991	RUS	62,67	225,0	140,0	205,0	570,0	614,57
4	Von Bachhaus Gundula Fiona	1981	GER	61,85	212,5	172,0	185,0	569,5	620,24
5	Kitamura Mayumi	1967	JPN	62,85	190,0	173,0	192,5	555,5	597,66
6	Noviana Sari	1984	INA	60,49	205,0	140,0	210,0	555,0	614,88
7	Bueno Erica	1980	BRA	61,75	195,0	160,0	192,5	547,5	597,05
8	Orsini Antonietta	1964	ITA	62,21	205,0	135,0	192,5	532,5	577,39
9	Van Dusen Kathleen	1988	USA	62,64	215,0	130,0	175,0	520,0	560,87
10	Joergensen Sk. Eline	1985	NOR	62,50	210,0	120,0	182,5	512,5	553,76
11	Krueger Sonja-Stefanie	1999	GER	62,18	207,5	132,5	165,0	505,0	547,77
12	Jativa Mery	1992	ECU	61,09	190,0	115,0	162,5	467,5	514,02
13	Szuch Shantelle	1979	CAN	62,72	177,5	100,0	190,0	467,5	503,78
14	Strolena Lenka	1984	CZE	61,88	175,0	90,0	175,0	440,0	479,03
15	Perez Socorro	1959	MEX	60,29	80,0	100,0	125,0	305,0	338,76

-72kg

1	Castellain Ana	1985	BRA	69,69	250,0	178,0	210,0	638,0	636,66
2	Ribic Priscilla	1972	USA	69,20	245,0	145,0	242,5	632,5	634,27
3	Elverum Marte	1990	NOR	71,52	237,5	130,0	240,0	607,5	595,59
4	Stinn Rhaea	1988	CAN	71,59	230,0	155,0	205,0	590,0	578,08
5	Medvedeva Yulia	1986	RUS	68,44	222,5	160,0	202,5	585,0	591,20
6	Timmers Ankie	1986	NED	71,68	200,0	160,0	217,5	577,5	565,32
7	Canelon Yenifer	1987	VEN	63,16	225,0	130,0	215,0	570,0	610,98
8	Marchenko Antonina	1989	UKR	70,98	230,0	155,0	185,0	570,0	561,68
9	Aguinaga Johanna	1993	ECU	65,28	205,0	165,0	182,5	552,5	577,80
10	Gongor Otgontuya	1991	MGL	67,20	205,0	115,0	195,0	515,0	527,31
11	Silberzahn Cathrin	1988	GER	68,23	215,0	125,0	175,0	515,0	521,59
12	Gudmundsdottir Helga	1974	ISL	66,06	185,0	135,0	182,5	502,5	520,94
13	Fydrich Nicole	1981	GER	68,14	187,5	105,0	195,0	487,5	494,23
14	Du Toit Chantelle	1985	RSA	71,17	152,5	107,5	162,5	422,5	415,61

15	Cohen Lucy	1983	GBR	70,83	162,5	102,5	150,0	415,0	409,56
—	Caldero Genesse	1985	PUR	66,95	—	110,0	160,0	DSQ	—
—	Ambre Bhakti	1982	IND	71,94	—	80,0	175,0	DSQ	—

-84kg

1	Blyn Liane	1972	USA	81,40	245,0	187,5	212,5	645,0	584,63
2	Strik Ielja	1973	NED	83,76	245,0	175,0	210,0	630,0	562,59
3	Tishakova Yevheniia	1989	UKR	80,68	262,5	140,0	212,5	615,0	560,08
4	Melnyk Tetyana	1985	UKR	72,15	237,5	170,0	202,5	610,0	594,57
5	Rahayu Sri	1992	INA	83,58	247,5	160,0	195,0	602,5	538,63
6	Arnesen Hille Heidi	1970	NOR	83,68	247,5	147,5	207,5	602,5	538,27
7	Sindikas Nadezhda	1986	RUS	80,81	230,0	165,0	205,0	600,0	545,94
8	Shotton-Gale Charlotte	1983	GBR	83,81	227,5	140,0	205,0	572,5	511,13
9	Liendo Nairu	1982	VEN	79,62	210,0	130,0	195,0	535,0	490,81
10	Aaberg Jane	1981	DEN	83,78	210,0	100,0	225,0	535,0	477,70
11	Wik Frida	1991	SWE	75,98	185,0	150,0	195,0	530,0	499,79
12	Civetta Christie	1992	GBR	79,48	190,0	115,0	175,0	480,0	440,83
13	Tichy Alexandra	1990	AUT	83,23	180,0	125,0	170,0	475,0	425,55
14	Savoie Dani	1990	CAN	75,36	185,0	115,0	172,5	472,5	447,84
—	Hung Min-Chu	1983	TPE	82,06	—	172,5	135,0	DSQ	—

84+ kg

1	Lough Bonica	1988	USA	128,58	297,5	197,5	230,0	725,0	572,68
2	Chang Ya-Wen	1984	TPE	95,00	260,0	160,0	227,5	647,5	548,04
3	Orobets Inna	1971	UKR	109,30	242,5	187,5	215,0	645,0	525,16
4	Szabo Agnes	1988	HUN	113,22	237,5	195,0	200,0	632,5	511,25
5	Van der Meulen Brenda	1978	NED	110,79	227,5	200,0	190,0	617,5	501,35
6	Phasey Kelly	1976	GBR	124,53	220,0	150,0	145,0	515,0	409,12
—	Hugdøl Hildeborg	1983	NOR	123,00	—	230,0	170,0	DSQ	—

Nation (points)

1.	U.S.America	44	[12+12+9+6+5]	2925,10 w.pts.
2.	Russia	44	[12+9+8+8+7]	3076,36 w.pts.
3.	Ukraine	43	[12+8+8+8+7]	2970,51 w.pts.
4.	Chinese Taipei	33	[12+9+7+4+1]	2815,10 w.pts.
5.	Indonesia	30	[12+7+6+5]	2371,13 w.pts.
6.	Brazil	26	[12+9+4+1]	2402,07 w.pts.
7.	Venezuela	25	[9+6+4+4+2]	2897,96 w.pts.
8.	Netherlands	21	[9+6+5+1]	2135,55 w.pts.
9.	Japan	18	[9+6+1+1+1]	2735,49 w.pts.

Best Lifters of Open

Rnk	Lifter	Nation	B.Weight	WF	Total	W.Points	C.Rnk.
1	Soloviova Larysa	Ukraine	62,99	10,741	641,0	688,50	1
2	Chen Wei-Ling	Chinese Taipei	46,75	13,501	500,0	675,05	1
3	Fukushima Yukako	Japan	46,72	13,507	477,0	644,28	2